

留学・研究計画書

氏名 川越 道子	留学機関名 ハノイ国家大学ベトナム・文化交流 研究センター
留学先国名 ベトナム	留学期間 西 2004 年 4 月 ~ 2006 年 3 月 歴
研究テーマ(留学目的) ベトナムにおける戦争の記憶の形成過程 —ドイモイ政策後の戦死者の供養を中心として—	
研究テーマ(留学目的)の説明	
<p>ドイモイ政策による市場経済化により、現在、ベトナムは急激な社会的経済的変化の過程にある。この過程において、日常生活のなかで、たび重なる戦争の痕跡を目にすること、戦争の記憶と出会うことは少なくなっている。</p> <p>その一方で、経済の安定化、生活水準の向上にともない、ベトナム全土において戦死者の遺骨収集、墓地の整備といった戦没者への関心が高まっている。国家や党は、戦死者の基礎情報の作成、烈士墓地の整備と管理、遺族への対応に積極的に取り組み、遺族個々人も近親者の戦死者の捜索と遺骨収集、一族の墓の整備を熱心におこなっている。</p> <p>この動きは、長い間行えなかった死者を弔う行為であると同時に、一方で社会においてはその戦争が公的記憶として生成する、他方で個人においては戦争体験の記憶が思い起こされる過程である。</p> <p>本研究では、このような戦死者をめぐる社会的な動きを、烈士墓地でのフィールドワーク及び遺骨収集を行う家族への聞き取りを通して検討する。これより、ドイモイ政策後のベトナムにおいて、いかなる戦争にかかわる公的記憶が形成されつつあり、そのなかで個人がいかなる個別の記憶を想起し、社会のそれと交渉させながら現在を生きているのかを考察する。</p> <p>従来のベトナム近現代史研究は、一次史料や人々の証言の分析から、史実を実証することを目的としてきた。その蓄積の上に本研究は、「記憶」という固定化されない意識に着目する。記憶が形成されたり思い起こされたりする状況の政治性を意識しながら、個人の記憶を検討することによって、個人の置かれている権力状況の解明、証言されにくい史実や個人の意識を考察する。ここから、従来のベトナム近現代史からこぼれ落ちてきた側面や人々の意識を明らかにする。</p> <p>また、烈士墓地をめぐる公的記憶の形成を検討する本研究の視点は、市場経済化の過程にあるベトナムの、対外関係や少数民族問題といった国内問題等に関する国家の方針を具体的に解明することを可能にする。</p> <p>これらを通して本研究は、ベトナム近現代史、及び現代ベトナム社会にたいする理解を具体的に深めることを試みる。</p>	

# 成果報告書

記入日 2006年10月 2日

氏名 川越 道子	留学先国名 ベトナム社会主義共和国	所属機関 ハノイ国家大学
研究テーマ：ベトナムにおける戦争の記憶の形成過程—ドイモイ政策後の戦死者の供養を中心として—		
留学期間：2004年7月～2006年3月		
<p><b>1. はじめに</b></p> <p>本報告では、現地で行った調査および資料収集の方法と内容、およびそこから得られた結果について述べる。</p> <p>本調査は、ドイモイ政策施行以降、戦没者の慰霊にかかわる墓地の整備によって戦争が公的記憶として定着し始める一方で、遺族による遺骨・墓搜索の過程において戦争体験や戦死者についての記憶が個別に想起されている状況に着目して、戦争の記憶の形成をめぐるベトナムの今日的状況を検討することを目的とした。またそこから記憶の形成をめぐる政治性を考察し、公的記憶からこぼれ落ちる戦争の記憶についても理解することを試みた。</p> <p><b>2. 現地調査の内容</b></p> <p>具体的には、大きく分けて次の2つの調査を行った。</p> <p><b>1) 各地戦没者墓地でのフィールドワーク：</b>留学前半は、ベトナム全土にある主要な戦没者墓地を訪問し、基礎データ収集（墓地形成の過程、規模、管理体制、参拝者総数の推移など）や墓地管理者へのインタビュー（管理者の個人史、墓地内の様子について）、墓地にある戦争モニュメントの記録を行った。北中南部の19省、計23か所の墓地で調査が可能となり（4頁、地図参照）、とりわけ近年国家儀礼の場となっているチュオンソン戦没者墓地（地図ではNTTSと表記）、ドゥオンチン戦没者墓地（NTD9）、ディエンビエンフー戦没者墓地（NTDBP）の3か所へは訪問を重ねて、国家儀礼の参与観察や同行事にかかわる公文書の収集を行った。</p> <p><b>2) 近親者の遺骨収集・墓搜索を行う遺族の実態調査：</b>留学後半は、近親者の遺骨や墓を探し出した遺族に聞き取り調査を行った。調査の主な対象は、遺骨や墓を探し出す特別な能力を有しているといわれる「Nha Ngoai Cam（ニャーゴアイカム、以下NNCと略）」と呼ばれる民間巫女を介して遺骨や墓を探し出した家族である。ここでは、まずハノイ市にある2つのNNC関連団体（NNCの能力を科学的に研究し、かつ遺族とNNCとを取次ぐ窓口になっている）とハノイ市やハイズオン市で活躍するNNCのもとに通い、参与観察や聞き取り、資料収集を行った。その後、NNCを介して遺骨や墓を探し出した19家族の了解を得て、複数回にわたって聞き取り調査（遺族の生活、NNCに依頼することに決めた契機や理由、遺骨・墓搜索の過程、戦死した近親者についてなど）を実施した。遺族が記した手記の収集も可能となった。</p> <p>上記の他にも、国家図書館や各公的機関にて戦没者にかかわる政策等の公的文書や文献資料を収集した。また調査の合間に積極的に各地の戦跡や戦争博物館を訪ねた。「調査」に限らず、日常生活でお世話になった人々や訪問先で出会う人々との交流が、一般のベトナム人（キン族を中心とする）の死生観や風俗習慣を理解するのに大変参考になったことも付して指摘しておきたい。</p>		

### 3. 得られた知見

#### 1) 戦没者墓地の形成と変遷

現在、ベトナムには2918か所の戦没者墓地（省管轄47か所、県管轄432か所、社管轄2439か所）がある。戦没者墓地の現状を検討する前に、ここでは墓地に関する政策の変遷をみることによって墓地建設の展開を概観したい。

政府通達を分析した結果、戦没者墓地の建設は、大きく3つの重要な時期に分けることができるといえる。一つ目は、①1954年の抗仏戦争後、同戦争による犠牲者の埋葬を目的として墓地の建設が正式に着工された〈墓地創建の時期〉。二つ目は、②激化する抗米戦争の戦中戦後に、同戦争による犠牲者の墓地新設と併せて従来の墓地が整備された〈墓地整備・拡張の時期〉。三つ目は、③ドイモイ政策施行後の社会・経済状況の変化に伴い、これまで整備されてきた墓地の意義や役割が変容しはじめる〈戦没者墓地の転換期〉である。

墓地創設以来、戦没者墓地は戦死者の埋葬を主な目的としてきた。しかし、その墓地の役割が大きく変化するのが、本調査で検討する③の〈戦没者墓地の転換期〉である。ドイモイ政策による経済的効果が明らかになり始めた1993年、ベトナム政府は、戦没者墓地とは後世の「愛国心や民族の誇り」を育てる「歴史教育」に関わる場であると述べた「20号指示」を出した。これ以降、戦没者墓地は、後世の歴史教育に深く関わる「文化施設」「歴史遺跡」といった戦争を記念する場として位置づけられていくことになる。

#### 2) 記念される戦争、戦没者

上述した「20号指示」通達後、各地の主要な戦没者墓地では、多額の国家予算が投与されて墓の整備をはじめ記念碑や銅像、戦争を描いた壁画などの戦争モニュメントの建設が着手された。とりわけ国家の戦没者慰霊の中心地となっているクアンチ省チュオンソン戦没者墓地、ドゥオンチン戦没者墓地、ライチャウ省ディエンビエンフー戦没者墓地においては、90年代に数回にわたって巨大な戦勝記念碑や兵士像の建設が行われた。ここではこの3か所の墓地におけるフィールドワークより、戦争や戦死者を表象し、公的記憶の形成に特に関わっていると考えられる2つの特徴を紹介する。

①**戦争モニュメント**: 戦没者墓地には、規定に従った個人情報の記された墓標、画一化された墓が規則的に並んでいる。戦没者個人や個別の体験を表す要素はみられず、戦没者は没個人化されている。その一方で、戦争や戦没者を積極的に可視化しているのが墓地内の戦争モニュメントである。建築コンペティションにて審査された戦争モニュメントは、ベトナム人兵士の勇ましさやすべての民族が団結している姿が強調される傾向にある。3か所の戦没者墓地においても銃を持ち戦闘服を着た逞しい兵士像をはじめ、少数民族とベトナム人兵、隣国ラオス人兵士とベトナム人兵士が肩を並べている像などが多数置かれている。中には負傷兵や入隊する息子を見送る母親像など、「勇ましさ」以外の側面を表現したモニュメントも存在するが、そこでは常に「多くの犠牲の上に得た戦勝」という文脈が伴われて、やはり戦争の意義が強調される。モニュメントにより戦争の意義や栄光のみが、墓地において記念されている状況が指摘できる。

②**英雄烈士の墓**: またモニュメントと同様に、墓地において戦没者やその戦争体験を具体的に示すもののひとつに「英雄烈士の墓」がある。「英雄烈士」とは特に優れた結果を残した功労者や「わが身を忘れて祖国に身をささげた者」に捧げられる称号である。英雄烈士の墓は他の墓と峻別され、一際大きく造られて墓地内の中心的な場所に置かれている。各英雄烈士たちの功績は詳細に記録されており、墓地内や地域の戦争博物館、教育の場などにおいてその功績が語り継がれている。英雄烈士の墓により、墓地内において兵士の栄光や武勇伝のみが残されて、顕彰されているといえる。

以上、簡単にみてきたように、国家により戦没者墓地が後世の歴史教育に関わる場として位置づけられることにより、墓地は戦争を記念する役割を担い始める。記念という性質上、そこでは戦争の意義や戦没者の栄光のみが残されていく。

次では、意義や栄光とは異なる戦争や戦没者の姿が、個人において想起される状況についてみていく。

### 3) 遺骨・墓搜索の過程において想起される戦争体験

戦没者墓地を整備する国家の動きと平行して、ドイモイ政策以降、個人においても戦没者慰霊への関心が高まっている。個人による慰霊の動きを通して想起される戦没者や戦争体験を検討するために、近年経済的安定が得られはじめた家族を中心に盛んに行われている遺骨・墓搜索の状況をみていく。とりわけ、ここではこの遺族の動きを促進させることになった「Nha ngoai cam」と呼ばれる民間巫女を介して遺骨を搜索した家族を取り上げることにする。

①NNCについて：NNCとは優れた第六感を持ち、それぞれ独自の能力によって遺骨のある場所を示したり死者の「靈魂」と話したりする者のことである。遺骨や墓のある場所を地図に描き、その後、現地にいる遺族に携帯電話で指示を出しながら遺骨搜索を手伝うこのスタイルは「遠隔地からの墓搜索 (Tim mo tu xa)」と呼ばれて、社会の注目を集めている。

②NNCに着目する理由：調査結果の前に、NNCを介して遺骨や墓搜索を行った家族に着目する主な理由を述べておく。まずNNCによる死者の「靈魂」を意識し、それを畏敬の対象とするという観念が一般のベトナム人の民間風習に即応していること。遺骨・墓搜索の過程においてNNCや遺族、そして戦没者の「靈魂」により個別の戦争体験が語られることが多いこと。「靈魂」との会話といった超自然的な世界が構築されることにより、社会的な規制よりある程度自由な発言を可能にすることなどがある。個々の事例を紹介することはできないが、以下、聞き取りの結果を簡単にまとめる。

③NNCによる遺骨・墓搜索の実態：近年多くの家族が遺骨や墓搜索に着手する主な背景として、各家庭において遺骨搜索に割ける時間的、経済的余裕ができたこと、戦死した両親兄弟を持つ当人、および参戦した世代が老年期に入ったことなどがある（この他にも身内に問題が発生したこと（家族の病気や怪我、事故など）、夢枕に死者が立ったことなどが搜索の契機となった事例もあった）。また軍事機密であるとして戦死の詳細を知らされず、遺骨搜索の手がかりが全くなかった多くの遺族にとって、NNCの出現は画期的な出来事であった。NNC関連団体によると、2000年度には約8900件の搜索依頼があったことが報告されている。

遺族によって遺骨搜索の過程が説明される際に特徴的なのが、遺族自らが体験した神秘的体験が語られることである。見知らぬ土地でNNCが予言していた通りの人物と出会った、墓の近くで小動物や昆虫が珍しい行動を示した、不思議な夢を見たといった個人の体験が熱心に語られて、NNCの能力を信じるようになった理由としてこれらの話が提示される。半信半疑であった遺族も搜索の過程でNNCの能力を認めるようになり、その上でNNCやNNCを介した死者の「靈魂」による戦争体験や戦死の状況が加えて説明されることになる。

④個別の戦争体験：そこで語られる個別の戦争体験は、当然のことながら多様である。戦死の状況は各事例によって異なり、爆撃や射殺による戦死をはじめ、マラリアによる病死、拷問による死亡、匪賊と間違われての殺害など、身内の戦死に関する話が遺族の口から具体的に語られる。遺族が既に知っている場合もあるが、NNCによってはじめて戦死の状況が知らされたり、より詳しく説明されたりする場合も多く、遺骨搜索の過程が個人の戦争体験や近親者の戦死の状況を想起させる過程ともなっていることが伺える。個々の具体的な戦争体験は、改めて戦時における犠牲の大きさを遺族に認識させる。上述した戦没者墓地における公的記憶が「戦勝」を強調するものと述べるならば、ここで語られる戦争体験とは、「戦勝」にいたるまでに経験した多数の「敗戦」に目を向けさせるものであるといえる。

さらにここで指摘しておきたいのは、遺骨搜索の過程がこのような「敗戦」の記憶の想起を促すだけでなく、戦没者に関する新たな語りを紡ぎ出す過程にもなっていることである。NNCや自らが経験した神秘体験などを通して、遺族は戦没者やその「靈魂」を感じとり、それと交感する。その体験により遺族は、記憶に新たな言葉を加えて自分自身の気持ちを整理することが可能になる。遺骨の搜索、発見、埋葬という一連の作業は、遺族の未完の物語を完結させるような役割をも果たしているのである。

#### 4. おわりにかえて：まとめと今後の課題

これまで戦没者墓地でのフィールドワーク、遺族への聞き取り調査の結果より、ドイモイ政策以降の戦没者の慰霊をめぐる国家や個人の動き、そこで想起される戦争、戦没者の記憶について検討してきた。国家により戦争の意義や栄光が強調される一方、そこからこぼれ落ちる様々な出来事―「敗戦」の記憶を含む―が私的な領域において想起されていた。

今後は聞き取られた遺族の語りを詳細に分析し、考察を深めていくことを課題としたい。また先にNNCの存在が戦争の記憶の想起を促しているとしたが、NNCによってすべての出来事や戦争体験が想起されるわけではないことも指摘しておきたい。増加の傾向にはあるが、遺骨や墓の捜索を行える家庭はまだ全体の一部であり、また墓や遺骨が見つからない場合もある。ある程度自由な発言が可能であるとはいえ、調査において旧南ベトナム政府軍側の戦没者の話が聞き取られることはなかった。今後も継続的に聞き取りを行い、個々の事例を集めていく必要があると考えている。

ある程度予測してはいたが、遺族への聞き取りの理解を得ることは、なかなか容易なことではなかった。戦争を振り返りそれについて語ろうとする社会の気運は、留学期間中も飛躍的に高まったが、それでもやはり戦争や戦没者、政治に関する話題が繊細で複雑なものであることには変わりがない。そのような中、手探りではじめてに調査もかかわらず、温かく迎え、協力し、励ましてくださったベトナムの皆様。この場を借りて心より感謝申し上げます。



(地図) 調査を行った戦没者墓地

#### 留学中、および留学時の調査に基づく成果

- 研究報告 ・ 2004年7月14日 “Experiences of immigration: The case of the Vietnamese living in Japan” (移民の経験：在日ベトナム人の事例から)、第2回ベトナム学国際学会、(於、ホーチミン市統一会堂)
- ・ 2006年4月8日 「ベトナムにおける戦争の記憶の形成過程」、百越の会、(於・国立民族学博物館)
- その他 ・ 詩「戦争のおはなし」、「国境の野で」、『樹林―通教部作品集』486号、大阪文学学校、2005年7月
- ・ 詩「沢蟹」、「無人村」、『樹林―通教部作品集』492号、大阪文学学校、2006年1月
- ・ 詩「トロピカル レイン フォレスト」『樹林―通教部作品集』498号、大阪文学学校、2006年7月
- ・ おかげさま通信 1号～28号 (予定)

## 留学を終えて

2004年7月から2006年3月31日までの1年9ヶ月の間(日本学術振興会特別研究員の採用に伴い、採用期間を短縮することになった。その後も特別研究員として渡越して現地調査を行ったため、再び帰国する9月1日までの間に綴った「おかげさま通信」も、財団事務局のご好意によりHPに掲載していただいた)、わたしは松下国際財団の奨学生としてベトナムで留学生活を送った。帰国した今、この時間がどれほど貴重なものであったかを、ようやく少しずつ理解しはじめています。

わたしにとってこの2年間とは、もちろん調査や研究に費やされるものではあったが、同時にいつの間にかどこかに落ちてきてしまったわたしの言葉たちを、探し歩く時間でもあった。2年間という時間が与えられていなければ、目を凝らして歩くことは恐らくはじめから諦めていただろう。ベトナムの各地を歩きながら、わたしは生きている人に出会い、死んでいる人に出会った。どちらの人も何も要求しないけれど、何も要求されないからこそ、わたしはその出会いの手触りや色、そしてその存在をどこかに留めたいと思った。歴史や国のなかで狭間で、生きていても死んでいても何の主張もしない人たち。

戦争や生死を言葉にすることは可能なのだろうか。ましてや戦争を知らず、本当に豊かな国で生まれ育ったわたしがそれら理解しようとするは無謀な試みなのだろうか。歩きながら何度もそれを考え、そして考えるために歩いた。ともすれば簡単に感情の波にのまれ、ともすれば簡単にからからに乾き干からびてしまう言葉とともに、ひたすら歩いてきた自分がある。どんな縁でここまで来たのか、とふと思う。とそう思うのは、もはや引き返せないところまで来てしまったときだ。多弁な沈黙を聞き、伏せた目の奥を覗き、淡々と並ぶ言葉に触れた経験は、気づかぬうちにわたしの内側に根を下ろし、引き返すことができないというのに、ますますわたしの足を重くする。

落し物はまだ見つからない。だが、ひたむきに歩き続けた足は自然、強くなった。きっとまた歩き始めるのだろう。

\* \* \* \* \*

振り返ってみれば、この2年間一度も病院のお世話になることなく、あちこち移動を繰り返したにもかかわらず、事故や盗難にあうことも全くなかった。それどころか行く先々で人に恵まれ、心のこもったもてなしや言葉を受け取った。これがどんなに希少なことであるかは、わたし自身が一番よく理解している。これとは、わたしのささやかな運によるものではない。それとは、大切な友人たちや大家さんをはじめとするベトナムの方々、またわたしを支えてくれた日本の友人たちや先生方、松下国際財団の皆様のお力添えによるものであり、そして何より、毎朝、実家の仏壇に花を手向ける母の祈り、口数少ないながらもわたしを信頼してくれている父の想いのおかげである。このような目に見えない祈りや想いを確かに感じられるようになったことも、ベトナムで得ることのできた大きな成果のひとつである。

最後になりましたが、わたしの人生に大きな影響を与えることになったベトナム留学の機会をご高配くださった審査員の先生方、そして松下国際財団に心より感謝申し上げます。留学中に書き始めた「おかげさま通信」も貴財団事務局のみなさまや先生方の励ましがなければ、ここまで続くことはなかったと思っております。ベトナムで蒔かれた種は、ゆっくりと、しかし確実に生長しております。豊かな土壌において、あたたかい光や澄んだ水を十分にいただいた種は、いずれ花を咲かせ、実をつけることでしょう。種をしっかりと育てていくことをお約束するとともに、松下国際財団のさらなるご発展をお祈りいたしております。

本当に有難うございました。



## 調査地の様子



チュオンソン戦没者墓地大記念台



墓地内の様子



戦没者墓地管理者の方



北部から南部の墓地へ兄の墓を探しにこられたご兄弟



NNC を介して発見された墓。墓標の裏に名前が刻まれている(DBP 墓地にて)



ハノイ市内にある NNC による遺骨・墓搜索事務所



NNC によって描かれた地図





NNC 関連団体主催、年度末総会での NNC 表彰式



NNC による死者供養儀礼の様子

### 留学生活の様子



ハノイの友人宅でお鍋パーティ



結婚した友人の新居にて食事会



ハータイ省フォン寺のお正月



調査地の子供たち



ハノイの街並み